

第7回 高知県建築文化賞審査総評

1. 審査委員長 堀部安嗣

建築の設計の上でまず重要なことは”配置計画”である。この配置計画に違和感を感じるものは、その後のプランや構造や素材やディテールが、いくら優れていてもボタンの掛け違いになっているような雰囲気を出すことはできない。建築の配置計画は絵画における構図のようなもので、構図が決まらなければ、そのあとは何も決まってゆかないのである。また、建築の配置計画は絵画の構図に対して言うまでもなく立体的である。3次元、4次元の空間の中での的確な配置を探り当てることは非常に難しく、ゆえに、そこに最も時間をかけて練らなければならない。さらに配置計画が的確か否かは建築の大小や用途の違いに関わらず建築を評価するための重要な評価基準として機能する。あたかもキャンバスの大小、油や水彩に関わらず構図が何より大切であるように。

今回の審査は住宅や学校や保育施設や商業施設といった様々な用途と規模の違いがあったゆえに、この建築設計の基本中の基本の配置計画の確かさと自然さという視点に軸足が置かれて評価が決まっていったように思う。

まず、優秀賞の”はれのぼ”はアーケード街の角地を的確なスケールと配置計画によって、風通しのよい人の居場所を創出していることに評価が集まった。建築の”つくられかた”にも希望を見出すことができた。ただアーケード側の設えには丁寧さと確かさを感じる反面、その奥の計画にはやや雑さと殺風景さを感じたことや、この建物の構造や骨格が将来の変化に柔軟に対応してゆけるかどうかは掴めなかった。

木造文化賞の”大豊学園”は設計者の高い力量が十二分に発揮された心揺さぶられる作品であった。プログラムに対してスケールがオーバーしているのと配置計画に的確さと自然さがみられなかったこと、またこの建物が使用後の状態ではなく使われ方の様子や状況が掴めなかったことが残念であったが、今後の木造建築の可能性を切り拓く作品であることは間違いなく、木造文化賞に相応しいと判断した。

新人賞の”おひさま保育園”はスケールがヒューマンで、また建物の隅々まで神経が行き届いた佳作であることは建物に入った瞬間から感じる事ができた。中庭と前庭との関係を考えて配置計画にもう少し説得力があれば間違いなくさらに上位の賞を狙ったのではないだろうか。建物や設計者の屈託のない爽やかさとシンプルさはまさに新人賞に相応しい。

最優秀の高知県知事賞には”四万十の家”が選ばれた。現地を訪れ、この風土や環境に身を置いてみなければ決してわからない納得感と安心感がある。平面的な配置計画の的確さに加えて、崖条例や眺望や道路との関係を鮮やかに、そして爽やかに解いた断面方向の配置計画も秀逸であるからだろう。建築は理性によってつくられるが、その理性を支えるのは人の情緒である。この住宅はまさに情理を尽くした感を建物全体から感じることができる。

人が住まう場所という”虚のない実体”の迫力は圧倒的である。そしてその実体に多幸感が溢れていることに審査員の心が揺さぶられたのではないだろうか。規模的には小さい建築であるが建築の魅力が凝縮された住宅にしっかりとした評価ができたことも

意義深いように思う。

今回、現地審査に選ばれなかった作品の中にも、実際に訪れたら素晴らしい建築であると想像できるものもあった。しかし提出されるポートフォリオの写真選択や構成に魅力がなかったので選出されなかった。つまり画面の”配置計画”に魅力がなかったのだろう。ここにも建築の配置計画の重要性があることを再認識した。

2. 審査委員 内海 彩

候補作を訪ね、高知の木造建築の質の高さを改めて感じた2日間であった。

その中で最優秀作に選ばれた「四万十の家」は、四万十川に面し背後に崖を背負う敷地の特性を存分に生かした作品である。空へ浮かべられた舟という当初のコンセプトを伺い現地を訪れてみると、なるほど確かに、小さな住宅ながらも、心が空や川や遠くの山々にまで広がっていくような伸びやかな気持ちになれる空間であった。崖との位置関係から1階RC造2階木造の混構造となっている。1階は玄関と土間倉庫、小さなゲストルームがコアになり、残りの約1/3は背後の崖と腰高さのコンクリート壁で緩やかに囲まれた土間テラスである。主な住空間は2階で、内部空間は主張しすぎないディテールで納められ、自然と視線が外へと向かう。四万十川のアクティビティを楽しみ、裏の崖地にも手を加えながら住処の更なる充実を図るクライアントのライフスタイルがこの住宅を一層魅力的にみせており、同時に、クライアントの生活もこの住宅によって豊かに彩られているのが感じられた。

優秀作の「はれのぼ」は、四万十市内のアーケード街に建つ。カフェと公衆トイレ、いくつかのテナント区画で構成されるこの建物は、アーケード側の木フレームとボックスの絶妙なバランス、ガラス張りのカフェ越しに見える奥の広場の明るさが印象的である。広場から建物を見るとやや殺風景なのだが、収益に直接つながらない外部・半外部空間の豊かさがこの建築の魅力であり、このアーケードの魅力となっていくはずだ。夜通し使える形でこのようなスペースを維持していくことは大変と思うが、ぜひ、第2、第3の「はれのぼ」が続いて欲しいと思う。

新人賞の「おひさま保育園」は、比較的規模の大きい木造保育園を、耐火木造棟を挟みながら一体の建築として実現している。あちこちに設計者自身の想いが溢れ出て、温かい気持ちになれる作品である。芝生の中庭をしっかりと囲む構成は、安心して子供たちを屋外で遊ばせられる一方、この場所だからこそ可能なリアルな自然と触れ合う保育から遠ざかってしまうようでもあり、保育施設の難しいところである。

木造文化賞の「大豊学園」は、難しい敷地条件の下で計画された見応えある作品である。ごく短い期間で設計・建設されたとの説明であったが、その中においてもCLTと貫を組み合わせた構法の開発などに意欲的に取り組み実現している点を高く評価したい。

一方、大豊町の1歳児から小学6年生までが過ごす空間として、やや大ぶりすぎるのではないかという点、既存の中学校も含め大豊町の教育・保育の連携が今後この校舎園舎を中心にどのような形で行われていくのかが見えにくいことが気になった。

「おひさま保育園」や「大豊学園」で気になったことは、建築「作品」としての質を問

うものではないのかもしれないが、建築「文化」の問題として考えてもよいのではないと思う。建築はクライアントや設計者、施工者が造るだけでなく、ユーザーによって磨かれ文化として根付くのではないだろうか。

3. 審査委員 渡辺 菊真

「住まいの型」と「住みでの深層意識の空間化」が紡ぎあげる未来

住まいは、住みでの想い、それも意識の深層まで根を下ろしたような想いが空間として具現化した時に、結晶としての輝きを放つ。住みでの想いは住空間だけにあるのではなく、住まいがある場所・風景とも緊密に結びついているので、住まいのある風景もまた結晶化し、その地の未来の原風景を構成していく。

一方、「住まいの型」というものがある。漁村、農村といった地と密接に関わる生業を持つ共同体の住まい。それは型と呼べる空間形式を明確に備えていた。都市においても都市構造に呼応する都市型住宅というものがあり、京都の町家はその代表例と言える。型を備えた住まいが、群をなす集落・都市では、その型を持つ建築を挿入することが、そのまま「地の建築」となる。仮に型に部分的変更を加えたにしても、それが型に刺激を与え、新しい型を誘導していく。おそらくはそんなことが長大な時間、繰り返されてきた。

戦後、特に高度経済成長期以後、伝統的な共同体は解体を余儀なくされ、その意味で生業と緊密に結びつく型、都市に固有の型を備えた住まいというものの根拠は薄弱化した。そういった現在の住まいでは、ナンテコトナイ日常のさまざまなものたちへ、とにかく「つなぐ」「ひらく」が（脅迫観念のように）めざされるか、あるいは個人の城として個々の想いに耽溺するかの、いずれかになることが多い。そこに常々違和感を感じてきた。

今回、現地審査をした7つの建築の中に、2つの住まいがあった。「四万十の家」と「九反田の家」である。前者は川遊びを無心にする住みでのための家であり、2階に持ち上げられた船のような木造住居は空に漂いながら眼前に広がる四万十川と溶け込み一体化する。後者は雑多な街並みを呼吸するかのような風情でありながら、ゆったりと流れる堀川の風景に扇状に広がる空間を2階に浮かべる。住まいが立つ地を選び取り、そこに「住む」ことへの想いを、建築家は住みでの意識の深層にまで降りて行って手繰り寄せ、結晶化させた傑作である。しかし、両者ともに「住まいの型」への意志は示されない。「四万十の家」は1階RC造、2階が大きく南面する木造であり、その構成はパッシブハウスとして極めて優れており、また、洞窟的暗がりから空への広がりへ一気に開放される空間構成は、立て込んだ街中における有効な型にもなりうる。「九反田の家」は高知市中心部から少しだけ外れた自由な気風がある場所にあり、周辺に散在する一風変わった構成の住まいや建築群と呼応する佇まいであり、さらには未完成な空間をあえて残して、これからも生成を続けていく住まいである。九反田が生成されてきた情景の縮図のようでもある。その一方でこの場所の共通の憧れである堀川との一体化を可能にする明確な立体構成も有している。「地と結びつきながら生成を続ける型」として新しい可能性を感じる。

手がける建築が、未来においていかに典型たり得るか、型になりうるかを問い続け具現化することが、建築家の生業だと常々考えている。型からの逸脱すらも新しい型への生成が睨まれるべ

きだと思う。ただし、建築に在る人の深層の願いが結晶化されることもまた不可欠である。そうでないと、「型」はただの無味乾燥な理念に墮してしまう。今回、二つの住まいから、建築の根源にあることの魅力と困難さを、改めて突きつけられたように感じている。「住まいの型の追求」と「住みでの深層にある風景」の2極の間を振動したのちの昇華が問われなければいけない。そこにこそ、未来の原風景が開かれるのだろう。それを心に深く刻み込んだ今回の審査であった。